

■ 特集「グループの可能性と広がり」

不登校児の親グループの発展段階に応じたファシリテーション

中 地 展 生

(帝塚山大学心理学部心理学科)

I. はじめに

筆者が研究対象としているグループは、当事者たちだけで行われる「セルフヘルプ・グループ」ではなく、そこに専門家や経験者などがスタッフ（ファシリテーター）として参加する「サポート・グループ」と呼ばれるものである。そのなかでも特に、不登校児の親グループに関する研究と実践を行っている。この領域に関しては、小野修氏のすぐれた臨床実践に基づく著書がよく知られている（小野，2000など）。また、以前筆者は、この領域の研究の流れを把握するために、1990年から2010年に発表された文献展望研究を行い、今後の課題の一つとして複数の親グループを対象とした調査研究の必要性を指摘した（中地，2012a）。そのような状況を踏まえて、筆者自身は、臨床実践を重視しつつ、複数の親グループを対象にして、心理テストやインタビュー調査、質問紙調査などによる多角的な調査研究を行う姿勢を大切にしている。今回、このような執筆の機会をいただき、簡単にではあるがこれまでの研究を紹介したい。

II. 不登校児の親グループに関するいくつかの研究

1. 家族システムへの影響

家族全体の状態をアセスメントすることが可能な「家族イメージ法」（亀口,2000）とインタビュー調査を用いた研究である（中地,2011a）。「家族イメージ法」では、家族成員のパワー（発言力、影響力、元気のよさなど）を5段階で得点化することができ、さらに両親連合や世代境界が達成されているかどうかを知ることができる。

調査期間は2001年8月～11月、調査対象者は4カ所の親グループ、合計19名の半年以上親グループに参加した母親（平均参加年数は5.07年（ $SD = 3.21$ ）であった。この19名に対して【時期1】：子どもが不登校を始めたころ、【時期2】：

親グループに入ってしまったところ（入って3ヶ月～6ヶ月後ぐらい）、【時期3】：現在（調査時点）、の三つの時期について家族イメージの作成を依頼し、その家族イメージを基にしてインタビュー調査も実施した。結果は、次のようなものであった。

- ・【時期1】や【時期2】では、両親に比べて不登校児のパワー得点が低い。
- ・【時期2】では、母親のみパワー得点が増加する。
- ・【時期3】では、父親、母親、不登校児三者共にパワー得点が増加し、三者間に得点の差がみられない。
- ・【時期1】や【時期2】では、両親連合や世代境界の未達成な家族がほとんどであるが、【時期3】になると、多くの家族で両親連合や世代境界の達成がみられる。
- ・インタビューでは、そのような家族イメージの変化の背景にはグループからの「援助効果」やファシリテーターの存在があったことが語られた。

以上の結果から、母親だけでも親グループに参加することで、家族システム全体にも肯定的な影響があることが示唆された。また、中地（2007）の事例研究でも同様に、母親だけでも親グループに参加したことでその家族にも影響を与えたことを報告している。

2. グループによる「援助効果」の特定

親グループに参加することで、どのような「援助効果」をメンバーたちが得るのかを調査した研究である（中地,2011b,2013）。援助効果に関する質問項目は、筆者の親グループの逐語録や毎セッション後のアンケートなどから収集した。それらの項目について、臨床心理士3名や親グループ主催者2名による内容妥当性の検討などを行い、最終的に51項目からなる質問紙を作成した。

調査時期は2008年6月～10月、調査対象者は、全国の43グループ、参加者462名であった。このうち回答があったのは、41グループ、参加者213名（回収率46.1%：男性15名、女性195名、無記名3名）であった。平均年齢49.17歳（ $SD = 6.14$ ）、平均参加年数は、4.90年（ $SD = 4.66$ ）、参加頻度は「ほぼ毎回参加している」が96名、「まあまあ参加している」が72名、「あまり参加していない」が30名、不明などが7名であった。分析には信頼性の観点から「ほぼ毎回参加している」と「まあまあ参加している」の合計168名のみを対象にした。

因子分析（主因子法、Promax回転）や項目ごとの参加年数による平均値の比較などを行った結果、五つの因子が明らかになった。第一因子「子どもとの関わり方の変化」（具体的な項目：“いつも自分の物差しで子どもを見ていたことに気がついた”など10項目）、第二因子「社会への積極的コミットメント」（同：“社会に不登校への理解を求めようと思うようになった”など2項目）、第三因子「情報取得」（同：“不登校に関する講演会や親の会の情報を得ることができた”など5項目）、第四因子「他の参加者への愛他的コミットメント」（同：“自

分の経験を話して、他の親の役に立つことができた”など2項目)、第五因子「気持ちの安定」(同:“自分の気持ちをわかってもらえた”など4項目)である。Cronbachの α 係数は順に、.89、.60、.80、.86、.78、であり、第二因子がやや低いもののその他の因子については十分な信頼性を確認することができた。

3. ファシリテーションに関する研究

(1) ファシリテーションとその内容

筆者の親グループ実践(中地, 2007など)から、不登校児の親グループに必要と考えられるファシリテーションをまとめたものが表1である。主なものを紹介すると、「①異質性のマイナス面の配慮」:メンバーは同じ不登校の親といってもそれぞれ背景も異なり、ペースも異なっている。特に、グループのまとまりがまだ不安定な初期段階では、メンバーがサブグループ化やドロップアウトしてしまわないように、できるだけ共通する話題(たとえば、家での子どもとのやり取りで困ったことや学校との関わり方など)に焦点を絞るといった介入が必要である。「②異質性のプラス面の活用」:メンバーたちのペースの違いや価値観の違いを最大限活用する。グループでの多様な価値観や考えにふれることで、自身の価値観を変えるきっかけを得ることができる。たとえば、子どもの不登校経験が長くいろいろなことを乗り越えてきたメンバーにその体験談などを話してもらうことも有効である。「⑦具体的な援助構造の工夫」: a) 一言も話さずに終わるメンバーがいないように最後に一言ずつ発言をする時間をもつ。 b) きりのいいセッションに全員でこれまでの感想を話し合う。 c) いきなりグループをスタートするのではなく、事前に「説明会」を開いて、メンバーとファシリテーターとが顔を合わせ、グループの進め方などを説明する。 d) 前回のセッションアンケートの感想を冒頭でファシリテーターが話すことで、セッション間のつながりを保つ。 e) グループを卒業した先輩メンバーをゲストとして呼ぶ。などである。

表1 ファシリテーションとその内容

ファシリテーション	内容
①異質性のマイナス面の配慮	グループの初期段階では、「共通する話題」に焦点化するなどの介入をする。
②異質性のプラス面の活用	メンバーのそれぞれのペースの違いや価値観の違いを活かす。
③グループの物語を共に創る	一つの「物語」に偏らない。ファシリテーター自身もこのグループをどうしたいのかを語って「物語」を紡ぐ。
④横のつながりを尊重	「雑談」という形であれ、メンバー同士の「横のつながり」体験を優先する。
⑤肯定面・肯定的な変化の強調	肯定的な変化が語られたら、なぜそれが生じたのかを尋ねる。肯定面を気付かせる発言をする。
⑥アドバイスや情報提供	子どもへの理解が深まるような具体的なアドバイスをを行う。地域の相談資源などの情報提供する。
⑦具体的な援助構造の工夫	一言コーナー、全員で感想を話す、説明会、セッションアンケートの活用、ゲストを呼ぶ、など。

(2) ファシリテーター行動認知と援助効果や参加頻度との関連

前述の援助効果に関する質問紙調査と同時に「親グループにおけるファシリテーターの行動をどのようにメンバーが認知しているか」についての質問紙調査を行い、援助効果などとの関連を考察した。この研究は、申（1986）のエンカウンター・グループに関する研究を参考に、親グループにおけるメンバーのファシリテーター行動認知の種類を統計的に明らかにしたものであり、中地（2012b）に報告した。また、再分析を行い、援助効果やグループへの参加頻度との関連を検討したものを中地（2013）にまとめた。

まず、因子分析（主因子法、Promax回転）によりメンバーが認知するファシリテーターの行動として次の四つの因子を明らかにした。第一因子「気づきの促進」（具体的な項目：“彼は子どもとの接し方について具体的なアドバイスをしてくれる”など11項目）、第二因子「相互作用の促進」（同：“彼はメンバー同士のコミュニケーションを円滑にしている”など7項目）、第三因子「個々の尊重」（同：“彼はみんなに自分の意見をおしつける（逆転項目）”など5項目）、第四因子「情報提供」（同：“彼は不登校についての講演会や親の会の情報を提供してくれる”など2項目）である。Cronbachの α 係数は順に、.89、.90、.82、.64、であり、第四因子がやや低いもののその他の因子については十分な信頼性を確認することができた。

次に、この四つの因子と参加頻度、援助効果の各因子との関連を検討した。その結果、参加頻度が「ほぼ毎回参加している」群では、ファシリテーター行動認知の「気づきの促進」が援助効果の「子どもとの関わり方の変化」と「気持ちの安定」の両方に十分な相関（それぞれ、 $r = .49$ 、 $r = .46$ ）がみられた。一方で、「まあまあ参加している」群では、「気づきの促進」と「子どもとの関わり方の変化」に弱い相関（ $r = .23$ ）があるものの、「気持ちの安定」とは無相関であり、このような違いが参加頻度を下げる一因と推測された。以上のようなことから、ファシリテーターが「子どもとの関わり方の変化」だけを重視するのではなく、メンバーが「気持ちの安定」をグループから十分に得られているかを配慮することが効果的なファシリテーションにつながると考えられた。

Ⅲ. まとめ

ここでは、我が子が不登校になり、その母親が親グループに入った場合ということ想定して、グループの発展段階に応じたファシリテーターの動きについてまとめる（表2）。

1. 開始段階

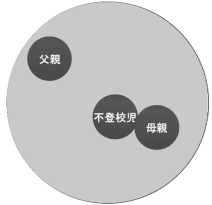
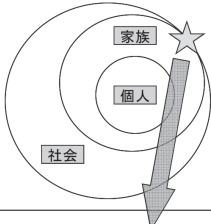
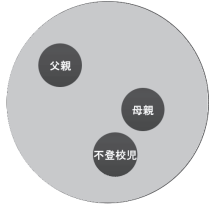
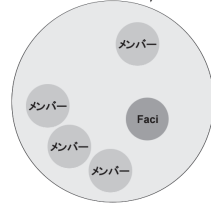
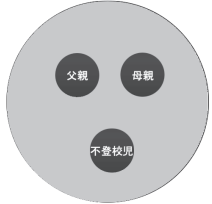
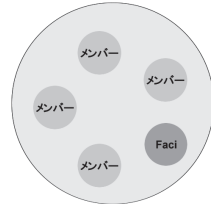
不登校児の家族は、世間体を気にしたり、引け目を感じたりして、その家族全体も社会から孤立していることが多い。【時期1】の家族イメージの多くでもそのような状況を示していた。そして、母親自身も子どもの不登校をどのよ

うに受け止めていいのか戸惑い、苦悩し、混乱の状態にある。そのようななかで、母親だけでも親グループと出会い、そしてつながるということは、家族が社会との接点を回復するという意味でも重要である。ファシリテーターはそのような母親が安心してグループに参加できるようにグループの準備をしっかりとしておくことが必要である。また、不安を抱いている母親たちへの配慮として、事前に「説明会」を開き、グループの進め方や目的、守秘義務などを丁寧に説明し、メンバーの疑問・質問に答えるなどの工夫が求められる。この段階のファシリテーターの目標を一言で表すと「丁寧な下準備」と言えよう。

2. 初期段階

下村（1993）は、Bateson（1972/1990）のサイバネティクス（cybernetics）研究などから、家族システムに生じる「ゆらぎ」を繰り返す「波打つような動き」を“変化の種を宿しながらも試行錯誤を続けている状態”ととらえている。このような状態は【時期2】の家族に共通する状態であろう。そして、当然、母親自身も「ゆらぎ」の状態にある。自身の気持ちや価値観が大きくゆれ動くなかで、自分を受け止めてもらえる場とつながり、そこで元気を取り戻していく。そして、メンバーやファシリテーターとのやり取りのなかから様々な気づきを得て

表2 グループの発展段階に応じたファシリテーターの動き

	家族システム	母親および家族の状態	親グループの様子	ファシリテーターの動き
開始段階		<p>グループと出会う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親は焦り、苦悩、混乱の状態にある ・母親の従来の子どもの学歴や勉強へのこだわりが強い。 ・両親に比べて不登校児のパワーが低い。 ・両親連合や世代境界は未達成である。 ・家族(母親)が社会(親グループ)との接点を回復するきっかけになる。 		<p>目標:丁寧な下準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開始にあたって、各相談機関や開催場所の現実の制限のなかで、グループの形態(オープン/クローズドなど)、目的、位置づけ、参加条件、回数、時間などを明確にしておく。 ・地域にある援助資源(相談機関や通信制高校など)の情報を把握しておく。 ・「説明会」を開いて、一度メンバーと顔を合わせ、目的や位置づけ、あるいは守秘義務などを丁寧に説明する。
初期段階		<p>グループに入ってしばらくしたころ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ悩みをもつ仲間やFaciに支えられて母親のパワーがまず回復する。 ・母親自身の気持ちや価値観(子どもや自分自身について)が大きくゆれ動く。 ・両親に比べて不登校児のパワーが低い。 ・母親が子どもや父親との間の適度な距離を模索するも、この段階では、多くの家族では、両親連合や世代境界は未達成である。 ・親グループをベースにして地域の他の場所にも足が向き始める。 		<p>目標:「ゆらぎ」を支えつつ「変化」を促す</p> <p>具体的なファシリテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異質性のマイナス面の配慮 ・横のつながりを尊重 ・グループの物語を共に創る ・アドバイスや情報提供 ・肯定面・肯定的変化の強調 ・具体的な援助構造の工夫(・異質性のプラス面の活用) <p>考慮すべき援助効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの安定 ・子どもとの関わり方の変化 ・社会への積極的コミットメント ・情報取得
展開段階		<p>グループへの継続参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親自身の価値観や行動の変化が生じる。 ・学歴や勉強へのこだわりよりも、子どものいままでできている面をみられるようになる。 ・子ども適度な距離についての見直しが進み、子どもは自分と独立した存在として接することができる。 ・母親だけでなく、不登校児や父親もパワーが回復し、家族システムのなかにも、両親連合や世代境界が達成される。 		<p>目標:相互作用の活性化</p> <p>具体的なファシリテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異質性のプラス面の活用 ・横のつながりを尊重 ・具体的な援助構造の工夫(・他の四つも必要に応じて行う) <p>考慮すべき援助効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初期段階の四つに加えて ・他の参加者への愛他的コミットメント

※一部“ファシリテーター”を“Faci”と表記

いくのがこの段階である。

ファシリテーションとしては、「異質性のマイナス面の配慮」「グループの物語を共に創る」「横のつながりを尊重」などによって安全なグループの基礎づくりをまず行うことが必要である。そして、そのうえで、「アドバイスや情報提供」や「肯定面・肯定的な変化の強調」によって母親の変化を支援していく。また、メンバーの構成にもよるが、場合によっては「異質性のプラス面の活用」も有効である。この段階のファシリテーターの目標を一言で表すと「ゆらぎを支えつつ変化を促す」と言えよう。

3. 展開段階

この段階になると【時期3】のような家族システムもみられるようになる。ファシリテーターによる「アドバイスや情報提供」や「肯定面・肯定的な変化の強調」などの直接的な関わりではなく、メンバー同士のやり取りを活用することがより可能となる。具体的なファシリテーションとしては、メンバーの「横のつながりを尊重」しつつ「異質性のプラス面の活用」を行っていくというようなメンバーを主体とした関わりである。メンバー自身、他のメンバーの役に立つことで、自己効力感を向上させることにもつながっていく（援助効果の「他の参加者への愛他的コミットメント」）。この段階のファシリテーターの目標を一言で表すと「相互作用の活性化」と言えよう。

IV. おわりに

このような研究を発表するときに自分自身でいつも注意をしていることがある。それは、親が原因で子どもが不登校になったと主張していると誤解されないようにすることである。筆者の研究は、あくまで親グループにはどのような効果があるのかを明らかにし、臨床家としてよい援助を提供するにはどうしたらいいのかを検討するために行ったものである。調査の過程で出会った親たちのなかには、親同士の傷のなめ合いをしているだけだと言われてつらい思いをしたという方がいた。筆者は、グループの持つ力は、そのような根拠のない批判を超えて、親自身の成長や、家族システムが次のステップに進むための大きな促進力となると考えている。

Lotery & Jacobs (1994) のカリフォルニア州のセルフヘルプ・グループを対象とした大規模な調査において、回答者の92%が専門家がグループ・ミーティングに参加することをよいことだと思っていることがわかった。当然、日本においてもそのような潜在的なニーズは高いと予想され、本研究のようなグループに関する臨床心理学的研究を積み重ねていくことが今後ますます必要になると考えている。

付記

本論文は2012年に九州大学に提出した博士論文「不登校児の親グループに関する臨床心理学的研究－家族システムの変化とグループによる援助効果を視野に入れたファシリテーション－」の一部を加筆修正したものである。このような発表の場をいただき感謝いたします。

文献

- Bateson, G. (1972) : Steps to an ecology of mind .Ballantine Book.／佐藤良明 (訳) (1990) :精神の生態学 思索社
- 亀口憲治 (2000) :家族イメージ法 福西勇夫・菊池道子 (編) 現代のエスプリ (心の病の治療と描画法) , 390, 167-178.
- Lotery, J.L. & Jacobs, M.K. (1994) : The involvement of self-help groups with mental health and medical professionals: The self-helpers' perspective. In F. Lavoie, T. Borkman & B.Gidron, Self-help and mutual aid groups: International and multicultural perspectives, New York: Haworth, pp279-302.
- 中地展生 (2007) :公立の教育相談機関における不登校児の母親へのグループ・アプローチ 心理臨床学研究, 25 (1) , 49-59.
- 中地展生 (2011a) :不登校児の親グループに参加した母親からみた家族システムの変化に関する実証的研究 心理臨床学研究, 29 (3) , 281-292.
- 中地展生 (2011b) :不登校児の親グループの援助効果に関する研究 帝塚山大学心理福祉学部紀要, (7) , 119-130.
- 中地展生 (2012a) :日本における不登校児の親グループ研究の文献展望－1990～2010年を対象に－ カウンセリング研究,45 (4) ,239-247.
- 中地展生 (2012b) :不登校児の親グループ参加者の“ファシリテーター行動認知”と諸要因との関連－参加頻度, 参加年数, グループのタイプの視点から－ 心理臨床学研究, 29 (6) ,797-802.
- 中地展生 (2013) :不登校児の親グループにおける参加者のグループ体験と参加頻度の関連 帝塚山大学心理学部紀要, (2) ,29-39.
- 小野 修 (2000) :子どもとともに成長する不登校児の「親のグループ」－ファシリテーターのためのマニュアル－ 黎明書房
- 下村陽一 (1993) :家族システムの変容に果たすコミュニケーションの役割－「セカンド・サイバネティクス」に基づく一考察－ 家族心理学年報, 11, 150-166.
- 申 栄治 (1986) :エンカウンター・グループにおけるメンバーのファシリテーター関係認知スケール作成の試み 心理学研究, 57 (1) , 39-42.